

紹介

熊沢誠著

『イギリス炭鉱ストライキの群像』

——新自由主義と闘う労働運動のレジエンド——

一九七九年五月、イギリス初の女性首相マーガレット・サッチャー率いる内閣が成立した。「鉄の女」という彼女の異名は、今日広く知られているところだろう。容赦なき増税や社会保障の削減、保守党穏健派の排除、都市暴動の徹底的な弾圧など、彼女をかくのごとく形容せしめた要因は多数存在する。しかし、サッチャーに「鉄の女」というイメージを最も強烈に刻印したのが、一九八四年から八五年にかけての炭鉱労働者のストライキに対する彼女の毅然とした対決姿勢であったということに異論をはさむ向きは少なからう。

本書が題材とするのも、このイギリス労働運動史上最長とされる炭鉱ストライキである。著者である熊沢誠氏は、イギリスの学校における文化的再生産の過程を描いたポール・ウィリス著『ハマータウンの野郎

ども』（筑摩書房、一九八五年）の訳者であり、日本の格差社会や労働問題に関する著作でも知られる。それゆえ、本書執筆の動機にも、新自由主義の席巻する現代社会や日本の産業民主主義（労働三権の保障）の貧しさへの批判的認識があるという。かような問題意識をもとに著された本書はまさに、過労死・過労自殺の絶えない日本社会に警鐘を鳴らす書とでもいうべきものだ。

序章では、先述した本書の執筆動機が示されるとともに、先行研究の紹介とその問題点が洗い出される。著者は、我が国で研究対象とされてこなかった「炭鉱ストを闘った人々」の姿を描くことを目指し、個人の日記やインタビューでの語りを史料として活用している。この点で本書は、近年注目されつつあるエゴ・ドキュメント研究のひとつだと位置づけられよう。

第一章は、この炭鉱ストの概要を記したうえで、その局面を「Ⅰ期・八四年三月～六月」、「Ⅱ期・七月～一〇月」、「Ⅲ期・一月～八五年三月」の三つに時期区分する。続く第二章は、ストの第Ⅰ期を扱う。全国石炭公社（NCB）による炭鉱閉鎖の提案と時を同じくして、ヨークシャーで始ま

った炭鉱ストはイギリス全土に拡大し、全国炭鉱労働組合（NUM）もこれを公認した。

第三章は、かかる炭鉱ストを闘った炭鉱夫らに目を向ける。彼らが護ろうとしたのは、自らの雇用であり、コミュニティでの濃密な人間関係であり、労働組合であったと著者は指摘する。

第四章が扱うのは、ストの第Ⅱ期、すなわちNCBとNUMの団体交渉の決裂や司法による弾圧の本格化など、炭鉱夫側の孤立の兆しが見え始める時期である。様々な主体による支援金・食糧支援があったものの、NUMや炭鉱夫らの闘いは、スト破りの防止に限定されるようになった。しばらく、八五年三月まで炭鉱ストを維持せしめたものは何だったのか。

この問いに答えるのが、第五章である。著者によれば、苦闘のストを支えたのは何よりも、「ムラ・コミュニティ」とりわけ女性たちであった。彼女らは、ある時はスト関係の事務員として、またある時はフード・キッチンのメンバーとして炭鉱夫やその家族を支え続けた。

第六章は、ストの第Ⅲ期におけるNCB

による復職促進 downstairs の本格化や炭鉱夫家庭の窮乏化を経て、八五年三月の最終的なスト終結までを追う。NUM はあくまでも、屈服を意味しない「協定なきスト収束」を決定したと著者は指摘している。

続く第七章は、炭鉱スト終結後のイギリス社会を描く。経営者優位の労使関係の構築・組合運動の「企業内化」が進み、九四年にはついに炭鉱の民営化が決定された。

以上を踏まえ、この炭鉱ストライキの群像を日本に伝える意義は何か。これを今一度示すのが、第八章である。産業民主主義と議会制民主主義とが対立関係にあることを認めつつも、日本の過酷な労働環境を思量する時、著者は産業民主主義に基づく労働組合運動の重要性を確信するという。

「むすびにかえて」では、本書の内容が簡潔にまとめられる。ここで著者は、サッチャー政権の新自由主義は多元的な民主主義社会の否定であり、八四年〜八五年の炭鉱ストがかかる新自由主義支配への最初の異議申し立てであったと結論付ける。

本書を特徴づけるのは何よりもまず、現代日本の労働問題に端を発する著者の問題意識である。それを反映するかの如く、本

書のいたるところで日本への言及が見出せる。とりわけ第八章で示される、他国と比した日本の賃金動向及び労働環境を目にすれば、我が国の産業民主主義がいかに希薄であるかを痛感するだろう。

また、著者はすでに教授職を退かれているため、研究環境の制約により、本書の参考・参考文献は必ずしも豊富とはいえない。しかるに、これまで本邦で公刊されたサッチャー時代を扱う著作、とりわけ社会史的なそれが依然として数少ないという状況に鑑みれば、社会学者らによる同時代史料に基づいて、「炭鉱ストを闘った男たち・女たちの声」に耳を傾けた本書が、イギリス現代史の理解をさらに深めてくれる貴重な一冊となることは言うまでもない。おそらく読者は、NUM や NCB、サッチャー政権を主軸とした炭鉱ストの経過をたどりつつ、当時を生きた人々の素顔に迫ることができるだろう。なかでも、女性たちが炭鉱ストに携わること、伝統的な性別役割分担が瓦解したとの指摘は大変興味深い。ストライキという経験は、十九世紀以降、あらゆる人々を縛り付けてきた近代家族の呪縛から彼女らを解放したのだろうか。

サッチャー政権以降のイギリスでは、保守党はもちろん、労働党さえも、労働組合の影響力を削減する方針を確立し、組合を基盤とする社会主義路線は捨て去られた。まさにこのターニングポイントとなったのが、サッチャー政権と炭鉱夫らとの対決であった。ぜひとも本書を手に取り、その後のイギリスを左右することとなった歴史的事件とそこに生きた人々に思いを馳せつつ、これを以て、日本の労働のあり方を今一度見つめ直す機会としていただきたい。

(四六判 二〇八頁 二〇一三年九月)

旬報社 税込一七〇〇円＋税
(松本陸斗 京都大学大学院
文学研究科修士課程)